

中外新聞

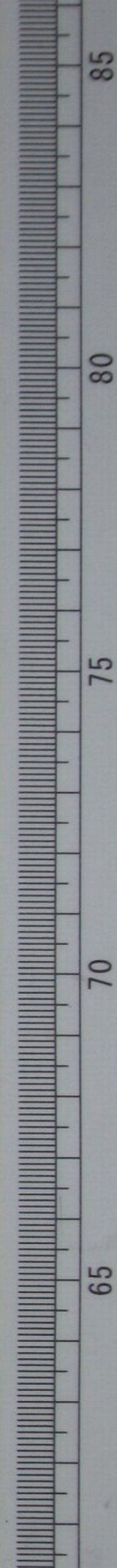
外篇

十九



西垣文庫
一
九

西垣文庫
文庫 10
7328
19



文庫10
7328
19



中外新聞外篇卷之十九

慶應四年五月

○上州沼田辺より帰り以商人より圖書

- | | | | |
|------|-------|------|------|
| 前橋勢 | 二百三十人 | 堀田勢 | 七八十人 |
| 足利勢 | 六十人 | 伊勢崎勢 | 八十人 |
| 七日市勢 | 四五十人 | 吉井勢 | 四五十人 |
| 小幡勢 | 三四十人 | 高崎勢 | 百人 |
| 安中勢 | 五十人 | 沼田勢 | 四十人 |

右官軍方去月廿四日朝三國峠^{たぎら}字盤若塚と中^{なかつ}所へ掛り以処
會津勢固り居終り戦争又相成以模様左の通



會津勢陣所ハ小高き所にて四方へ胸壁を築き大砲二挺小銃二十挺計りて相守居り陣屋より二三丁の間往来へ五寸釘を打抜いた杉板を上向けに並置其上へ砂を敷ふり會兵僅々六七人相備へ居り處へ官軍表口の先手堀田勢夫より東山峯傳へ高崎勢寶子峠の小道へ吉井勢都合三方より一時は小銃打掛け押寄り處會の陣中より大小砲打出し相應り得共折悪く朝霧深く咫尺も不分明以上會兵小勢にて責立てられ六ヶ交相成り裁其隊長の由小林勇と名乗り以ての并外二人寄手の内へ三間柄の鎗にて突て出堀田勢一人前橋勢一人吉井勢の内吉田善吉と名乗り以ての都

合三人討取其外七八人へ手を負せ苦戦のりて四方より砲銃にて劇敷打をくめられ小林勇も前橋の手は討取外二人も討死の由にて終は退軍途中浅貝二井の両宿へ放火致し静に兵を收めり由官軍先手前橋勢の六日市迄出陣其外も塩沢宿迄出張會兵の陣所小出辺の松子相探り敵兵嚴重に固り居り由りて如何の譯りや一同引取堀田前橋兩勢を永井村を固り其外を不殘沼田宿へ引上げ宿陣在り
但石戦争にて官軍即死三四人にて討死手負等格別無之由沼田辺にて居りて道路の夙同りて多人教

死人手負有之いて吉井前橋高崎等へ夫と送り込こい趣まこ
い右みぎの全く本文の板釘いたなぐしして殊ことの外の怪あや我有わが之の以も由よし承うけ
りりす

會兵隊長小林勇の首級くびの永井宿ながいと梟首うさぎ致いたし外二人の首級
の戦地道端いくさみちと取捨とりいす

新田万次郎手兵五六十人程いさめ引率ひき沼田辺ぬまのへまで出張しゅちやうの由よして
白井宿通行相成しらくいす

右みぎの當月五日沼田町出立いして唯ただ今立帰いまたりい旅人の咄はなし
産うい承うりいす書記しやくきし差上さしあす

五月九日

○雜説

閏四月五日保料の世子主従二十四人會津へ向けむかひ相越あ同
所領分境ところを固かり居ゐる會兵へ此度君家の為ためり脱走だつそう致いたし其
の城下迄相越あいり通とし相成あい極たると申ま入いられい處會兵
より答へる仰おんがの通り相違無あ之の裁さりい共見知あの者無な之の有あ
見知あり人辰裁あい迄あ申ま可べ成あ音あ申ま述あり付あ同所より半道
程立退あ居ゐる太田原の人数より理あ不あ尽あり大小砲打掛あら
と主従逃あれ道あもああく不殘あ切腹あ致いたり無程會藩見知人
来り右みぎの保料の若君と相違あああき役相分ありい付境諸物頭
の事あの無あ申あ訳趣あして切腹相果あいす也

東海道由井奥津の間田の畔は小あゝ井戸あり近頃不斗其
井水へ白布或ハ木綿糸あを浸し紺染をいつく事を見出
しより其色始々藤色の如くもあり永く浸し置間上紺色
をあり由因て右近辺ハ勿論遠方よりも染物を持参り日
々群集いつくいと村民の咄あり

○擬製并重板を禁むる論

西洋はパテント并コピーライトと云へる法ありパテント
と云都て何品もてハ新奇發明の工夫を以て世の人の

為めは可然りのを製し始め一當人へ政府より特許を以て成
功とを褒賞して何年間他人の模倣する事を禁むるの令
を出し且其者へ免許状を賜り獨り其一家に限り製作せし
むる法を云あり尤他人若し同品を擬製し之を賣らんと
欲する時ハ此本局へ税を出し許しを得るべし然らざれば能
えざる事ありと人皆又コピーライトと云を同一く政府よ
り著述家へ與ふる處の免許ありて其者積年勉強の學術を
以て書籍を著作し或ハ教日苦辛して外国の書を訳述せし
功勞又報ゆるが為り永く他人の重板を禁止するの法を云
ふ實は此二法ハ富国經濟を計る為めは最才一の良法あり

其^其誤^誤如何とあれは其者多年苦心して試験の爲め若干の財を費し甚しき家産を傾け且精神を消耗し漸くよして成功せし新奇の品を世に賣出ると他人忽ち其功巧を奪ひ勝手は擬製し得る時はいまご自分の勞費だも償ふ利益のあらざる内徒らよ他人を利せらるゝに至り我は益あり却て損なり寧他人の工夫を盗みて擬製するの安きに如うどと之より怠惰に至るべし借又著述に至ると之と弁しき道理よく学者数年の苦辛よく一部の新書世に出る故数日勉強の功成りて一科の訳書賣出せし時他人忽ち重板して其功勞を奪ふ時の貧生費心を醫するの料を空しく暗生其商

等の口腹を肥せよ至るべし是又開化文明の妨げを為し事特又大あり

按るる方今

王政の一新の際に當り要路に居る有司等必ら疾又此事へ着眼せられしを知るべく先頃京坂の英商等江戸諸名家の著述類を頻りに重板する由の報告慥ありよとりて之を茲に論ぜざるを得ば希く此二法を速に採用せられて人々を以て力を惜まば各々得たる學術を十分よ尽さしむべきなり又思ふ方今日本よく只新發明の物計りよパテントを出しよの

みあはば西洋有益の品物を我国より一番又模造せし
もの又傳習せしものへも届次才又其免許を出し年限
中他の製造を禁し其者へ税を收むる事を免れしやへ
し然らば人々工夫を凝し或も傳習を力を尽し遠く彼
国へ渡海して学ひ來るものも出來べし然らざる以上
を誰も彼も對視合ひ居るのみより濡手で粟の了簡
らり決して製造の學術又骨折りのあるべし然らば必
しも予が卑論の行えしに至りあば世の中静である
や否直又種々の製作始り実学の業大に起りて暫時は
富国の一端を顕さん事疑ふべしと云

度部一郎述

○
抑我國は於て新聞紙を江戸開成會社の中外新聞に始り其
遺漏を補ふ為め中外新聞外篇續出一時は亦海軍會社に
於て内外新聞次て出加ふる公報雜報の刊行あり則是を
日本に於ける新聞局の濫觴と云ふ亦來各社の新聞連續競ひ
出既近且に至りては其類凡二十餘種あり然れ共今日斯
く新聞の盛あるを致す事を元開成會社柳川氏の功より
所謂西洋に於ける公許本局と稱すべきもの即是あり先生
昔日より新聞に心を用ひ事あれば必らば自ら筆記して之

を廣く同好の事のく貸与し丹精^{えんせい}茲^{こゝ}の年ありて今日漸く公
行^{こう}ものの時至^したり然るに世人新聞の因て盛^{さか}なる所以を知
らざる事の多きが故予其功勞を褒揚^{ほうやう}して普^ひく茲^{こゝ}に示^しすと
云

無盡藏主人述

